

中学生の英語学習状況と 学習意欲

信州大学准教授
酒井 英樹

本章では、「第1回中学校英語に関する基本調査（生徒調査）」（以下、「生徒調査」）の結果に基づいて、特に中学生の英語学習の状況と英語学習意欲に焦点を当てて報告する。「生徒調査」は、中学2年生を対象にして、中学校入学以前の英語学習について、中学校での英語学習について、学校外の英語学習について、英語学習に対する意識について、英語や外国への意識について、質問紙調査を行ったものである。有効回答数は、2,967名（男子53.1%、女子46.6%）であった。

1 中学校での英語学習について

まず、中学校での英語学習の状況を報告する。本調査から明らかになったことをまとめると次のようになる。これらの点について、詳細にみていく。

- 好きな教科としての英語は9教科中8位である。
- 約6割の生徒が英語の授業をあまりわかっていない。
- 英語の授業の理解度が中程度の生徒は、わからないことがあると「友だちに聞く」ことが多い。英語の授業をほとんど理解していない生徒は、「とくに何もしない」。
- つまづきに関して、教師と生徒の認識がずれている。
- 英語の授業の理解度と、英語を好きな教科として考えることの間で関係がみられる。

1) 英語を好きな教科として挙げる生徒は少ない

「あなたは、どの教科が好きですか」という

質問（複数回答）の結果から、「英語」（25.5%）は9教科⁽¹⁾のうち、「国語」（25.0%）に次いで2番目に低いことがわかった。一番好きな教科は、「保健体育」（53.5%）であった。また、「英語」の結果は、「数学」（32.8%）や「理科」（35.3%）の結果よりも低かった（図表省略）。

図3-1は、クラスター分析（平方ユークリッド距離、ワード法）⁽²⁾の結果を示したものである。細かくは、国語と英語、美術と技術・家庭科、数学と理科がまとまっている。すなわち、中学2年生において、いわゆる文系、理系、実技系という志向性がみられることが示唆される。

この「生徒調査」から明らかになったことは、「英語」を好きな教科として挙げる生徒の少なさである。これは、英語嫌いの多さを示唆している。数学嫌いや理科離れがよく議論されているが、英語嫌いにどのように対処していくかも深刻に考えるべき課題であることを示している。「英語」と「国語」が好きな教科としてまとまった結果を考慮すると、言語教育として英語と国語が連携する必要があるだろう。

図3-1 好きな教科に関するクラスター分析

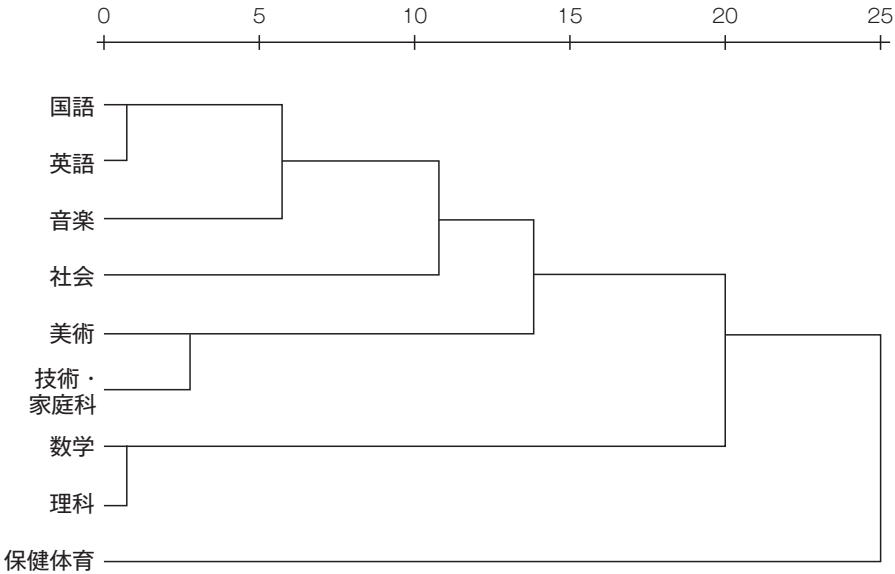
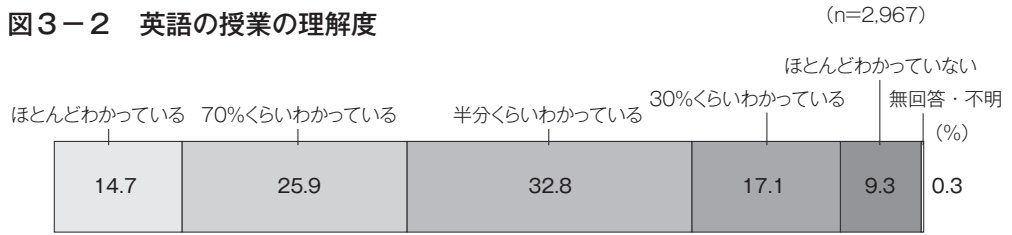


図3-2 英語の授業の理解度



次節では、英語の授業の理解度について分析する。

2) 約6割の生徒が授業を理解していない

図3-2は、英語の授業の理解度を示している。「あなたは、学校の英語の授業をどれくらい理解していますか」という質問に対して、「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」という回答が合わせて40.6%であった。約6割の生徒が、あまり授業を理解していないことが示唆される。

表3-1は、「英語の学習でわからないことがあったときに、あなたはどのようにしますか」という質問について、英語の授業の理解度別にみたものである。全体として「あてはまる」という回答の割合がもっとも高かった項目は、

「友だちに聞く」(61.1%)であった。「学校の先生に聞く」という回答は、38.4%で4番目であった。

また、表3-1は学校の英語の授業の理解度別の結果を示している。理解度が高い生徒は、理解度が低い生徒よりもさまざまな方法を用いている。中でも、「ほとんどわかっている」生徒の半数以上が用いている方法は、「辞書(電子辞書を含む)で調べる」「塾の先生や家庭教師の先生に聞く」「家族に聞く」という項目だった。また、30%~70%くらいの理解度の生徒が多く用いているのは、「友だちに聞く」だった。さらに、「ほとんどわかっていない」生徒の場合、「とくに何もしない」という項目の割合がもっとも高く(45.8%)、次いで「友だちに聞く」が39.7%であった。

表3-1 英語の学習でわからないことがあったとき（英語の授業の理解度別）

(%)

	全体	ほとんど わかっている	70%くらい わかっている	半分くらい わかっている	30%くらい わかっている	ほとんど わかっていない
	n=2,967	n=436	n=767	n=973	n=506	n=277
友だちに聞く	61.1	48.4	<u>65.3</u>	<u>67.4</u>	65.2	39.7
辞書（電子辞書を含む）で調べる	44.2	<u>62.8</u>	<u>53.8</u>	43.3	28.5	20.6
家族に聞く	40.2	<u>50.0</u>	<u>43.5</u>	41.6	33.8	22.4
学校の先生に聞く	38.4	<u>47.2</u>	<u>46.8</u>	37.7	30.0	19.1
塾の先生や家庭教師の先生に聞く	38.3	<u>53.2</u>	<u>47.3</u>	36.9	25.5	18.1
参考書や問題集で調べる	28.0	<u>37.2</u>	<u>34.4</u>	29.1	18.6	9.0
とくに何もしない	12.0	5.0	4.3	8.4	<u>18.0</u>	<u>45.8</u>

注1) ○は理解度別の中で最大値。____は2番目の値。

注2) 複数回答。

注3) 「その他」は省略。

教員は、生徒の英語学習における課題を把握するように努める必要がある。「生徒調査」と「教員調査」の結果を比較すると、教員の認識と生徒の認識のずれが指摘できる。表3-2は、生徒が英語学習においてつまずきやすいポイントを示している。「文法が難しい」という回答がもっとも高く（78.6%）、続いて「英語のテストで思うような点数がとれない」（72.7%）、「英語の文を書くのが難しい」（72.0%）であった。表3-3は、「第1回中学校英語に関する基本調査（教員調査）」（以下、「教員調査」）において、「英語に対して苦手意識やつまずきを感じている生徒は、どのようなことが原因だと思いますか」という質問に対する回答結果を示している。「生徒調査」の回答と照らし合わせてみると、「文法事項が理解できない」という項目は45.7%で6番目に挙げられている。また、「テストで思うような結果を得られない」という項目は33.8%で7番目である。「文や文章を書くことが苦手」という項目は58.3%で4番目である。すなわち、「教員調査」では生徒自身がつまずきのポイントだと感じている項目が低い順位となっており、双方の認識がずれていることがわかる。

図3-3は、英語の授業の理解度と、英語を好きな教科として挙げたかどうかの関係を示している。この両者に関係があることが示

唆される。たとえば、「ほとんどわかっている」と回答した436名のうち、英語を好きな教科として挙げた生徒は289名（66.3%）で、挙げなかった生徒数（147名、33.7%）を上回っている。英語の理解度が低くなるのにつれて、英語を好きな教科として挙げる生徒の比率は小さくなっている。すなわち、英語の授業の理解度が高い生徒の中では英語を好きな教科として挙げる割合が高く、英語の授業の理解度が低い生徒の中では英語を好きな教科として挙げる割合がかなり低い、と言える。

「生徒調査」から明らかになった課題は、英語の授業の理解度の低い生徒の多さである。授業の内容を工夫することが重要であろう。また、生徒がわからないところがあったときの支援体制を工夫する必要がある。理解度の高い生徒は、わからないことがあったときに自分で（辞書や参考書などで）調べたり、塾の先生や家庭教師の先生や家族に聞いたりして解決している。一方で、理解度が低い生徒にとって頼りになるのは、友だちである。「学校の先生に聞く」という方法をとる生徒は半数に満たなかった。とくに理解度が低い生徒はあまり教員に頼っていないことが示された。また、英語の授業の理解度と英語を好きな教科として挙げることには関係があることが示唆された。授業を理解できるようになれば、

表3-2 英語学習でつまずきやすいポイント（「生徒調査」）

(n=2,967)

		(%)
1	文法が難しい	78.6
2	英語のテストで思うような点数がとれない	72.7
3	英語の文を書くのが難しい	72.0
4	英語を聞き取るのが難しい	65.8
5	単語を覚えるのが難しい	62.9
6	英語を話すのが難しい	59.6
7	英語に限らず自分からすすんで勉強する習慣がない	53.7
8	外国、異文化に興味をもてない	44.8
9	英語の文を音読するのが難しい	44.7
10	英語そのものが嫌い	43.9
11	英語に限らず、勉強する気持ちがわからない	43.0

注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) ■は特徴的な項目。

表3-3 生徒のつまずき（「教員調査」）

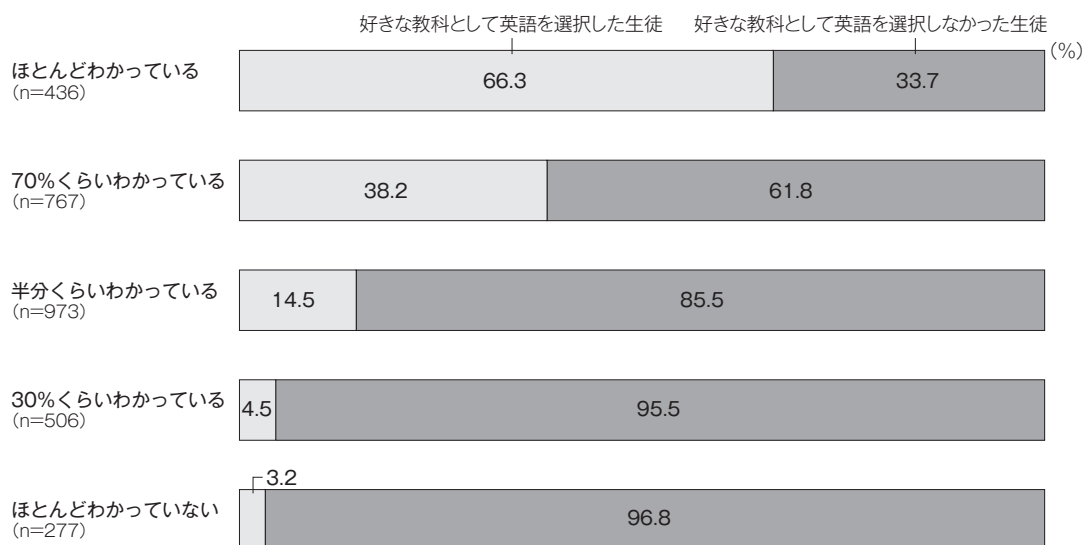
(n=3,643)

		(%)
1	単語（発音・綴り・意味）を覚えるのが苦手	68.8
2	英語に限らず、学習習慣がついていない	68.0
3	英語に限らず、学習自体への意欲が低い	61.0
4	文や文章を書くことが苦手	58.3
5	文字や文章を読めない（文字から音にうまく変換できない）	50.2
6	文法事項が理解できない	45.7
7	テストで思うような結果を得られない	33.8
8	英語に対する抵抗感	27.5
9	英語や外国、異文化に興味が持てない	7.0

注1) 「とてもあてはまる」の%。

注2) ■は特徴的な項目。

図3-3 英語の授業の理解度と英語が好きで教科であることとの関係



注) 「どの教科が好きですか」（複数回答）という質問で、「英語」を選択した生徒を「好きな教科として英語を選択した生徒」、「英語」を選択しなかった生徒を「好きな教科として英語を選択しなかった生徒」としている。

もっと英語を好きであると感じる生徒が増える可能性がある。

2 英語の学習意欲について

次に、中学校での英語学習意欲に関する報告を行う。本調査から明らかになったことをまとめると次のようになる。

- 約4割の生徒にとって、英語学習のやる気をもっとも高い時期は中学1年生の始めの頃である。
- 英語が苦手となる時期は、中学1年生の後半から中学2年生の始め頃である。

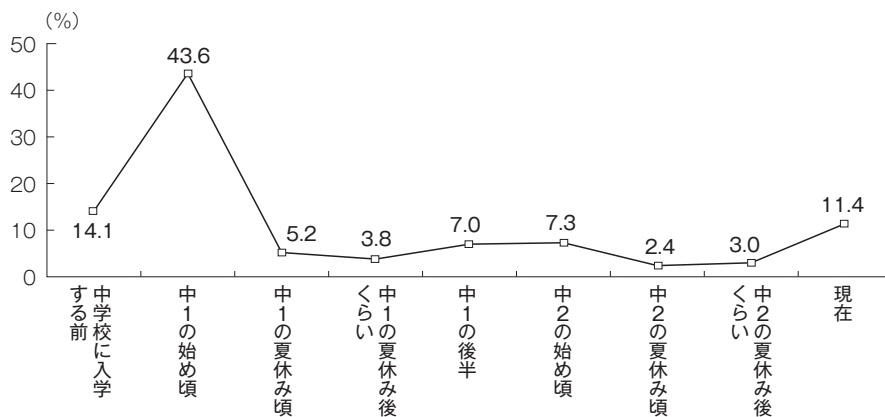
- 生徒の英語の学習意欲は、英語学習への興味関心に関するもの、受験や成績に関するもの、そして、教員に関するものに分けられる。
- 英語に対する認識別（詳細は14ページ参照）にみると、英語学習の動機の種類は異なる。

1) もっともやる気が高い時期は中学1年生の始めの頃

図3-4は、「あなたが、もっとも英語学習のやる気が高かった時期はいつですか」という質問に対する回答結果を示している。この

図3-4 もっともやる気が高かった時期

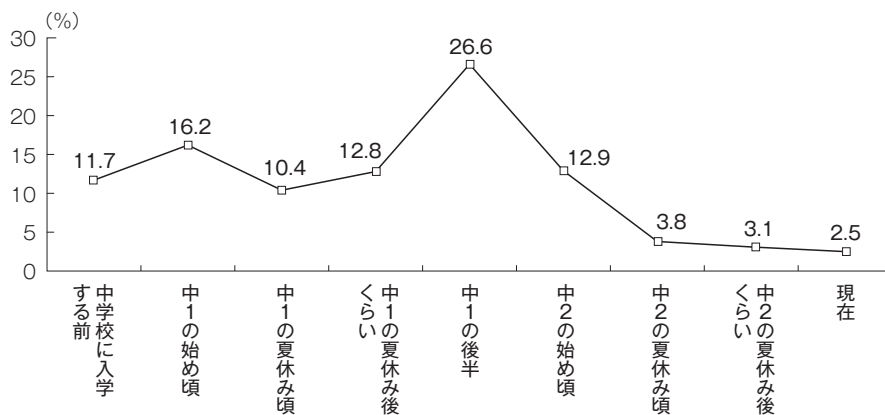
(n=2,967)



注1) 「現在」は、本調査を実施した1月～2月（中2の後半）を示す。

注2) 「無回答・不明」は省略。

図3-5 英語を苦手と感じるようになった時期



注1) 「現在」は、本調査を実施した1月～2月（中2の後半）を示す。

注2) 英語の「得意・苦手」について「やや苦手」「とても苦手」と回答した1,833名のみを対象。

注3) 「無回答・不明」は省略。

結果から、「中1の始め頃」(43.6%)がもっとも高い時期であり、続いて、「中学校に入学する前」(14.1%)となっている。

また、図3-5は「あなたが、英語を苦手と感じるようになったのはいつ頃からですか」という質問に対する回答結果を示している。「中1の後半」という回答が26.6%ともっとも高く、続いて「中1の始め頃」(16.2%)、「中2の始め頃」(12.9%)が高かった。また、「中学校に入学する前」に英語を苦手と感じるようになったという回答は11.7%であった。

図3-4と図3-5の結果から、次のことがいえよう。まず、小学校における英語教育(活動)により、中学校に入学する前からすでに苦手意識を持っている生徒が約1割存在することである。しかしながら、中学1年生の始めの頃は多くの生徒(43.6%)が英語学習に対

して高い意欲を持っている。そして、中学1年生の後半から中学2年生の始め頃に、苦手と感じる生徒が多く生じるということ(それぞれ26.6%、12.9%)である。

今後、小学校の外国語活動の必修化にともない、ますます多くの生徒が小学校英語を経験してくる。その結果、中学校入学時にすでに英語を苦手と感じる生徒が増える可能性も否定できない。しかしながら、中学校教師として考慮すべき点は、中学校入学後の英語学習であり、中学校の英語の学習において、多くの生徒に苦手と感じさせていないかどうか省みる必要があるだろう。

2) 3種類の英語の学習意欲

中学生がどのような英語学習動機を持っているのかを分析するために因子分析を行った。

表3-4 英語学習動機12項目の因子分析結果(パターン行列)

項目	因子分析結果 (%)		
	第1因子	第2因子	第3因子
英語が好きだから	<u>0.803</u>	-0.190	0.217
英語の勉強がおもしろいから	<u>0.782</u>	-0.184	0.243
英語を勉強すると視野が広がるから	<u>0.725</u>	0.134	-0.011
外国を旅行するときに使いたいから	<u>0.655</u>	0.087	-0.045
就職するときに役立つから	<u>0.500</u>	0.431	-0.120
できるだけ良い高校や大学に入りたいから	0.236	<u>0.698</u>	-0.056
英語のテストでいい点を取りたいから	0.226	<u>0.612</u>	0.075
中学生のうちは勉強しないといけないから	-0.078	<u>0.608</u>	0.044
成績が悪いと親にしかられるから	-0.096	<u>0.457</u>	0.057
英語の先生がはげましてくれるから	0.003	0.079	<u>0.846</u>
英語の先生が好きだから	0.048	0.030	<u>0.807</u>
英語ができると優秀だと思われるから	0.226	0.262	0.277

注1) 「英語を勉強しているのは、どうしてですか」という質問の回答結果から算出した。

注2) _____は、負荷量が0.450より大きい値を示している。

表3-4は、英語学習動機に関する12項目に対して、因子分析(主因子法・直接オブリミン)を行った結果を示している。3つの因子が抽出された。第1因子は、英語学習そのものに興味関心を示している項目(「英語が好きだから」「英語の勉強がおもしろいから」)や、英語学習に価値を認めている項目(「英語を勉強すると視野が広がるから」「外国を旅行するときに使いたいから」「就職するときに役立つから」)から成り立っている(5項目、 $\alpha = .848$)。第2因子は、受験や成績に関する項目(「できるだけ良い高校や大学に入りたいから」「英語のテストでいい点を取りたいから」「成績が悪いと親にしかられるから」)や、義務感に関する項目(「中学生のうちは勉強しないとイケな

いから」)から成り立っている(4項目、 $\alpha = .717$)。第3因子は、教員に関する項目(「英語の先生がはげましてくれるから」「英語の先生が好きだから」)から成り立っている(2項目、 $\alpha = .851$)。

表3-5は、英語に対する認識別に英語の学習動機をみた結果を示している。英語が得意で、英語が好きな教科であると考えている中学生(「得意・好き」群)に関する結果は、第1因子の項目で高かったこと、第2因子の項目のうち否定的でない項目において高かったこと、さらに第3因子の項目でも比較的高い数値を示したことである。つまり、この群の中学生の特徴は、内発的に動機づけられており、受験や就職などの目的に対して英語の

表3-5 英語に対する認識別の英語学習動機の結果

項目	(%)			
	得意 好き n = 630	得意 嫌い n = 484	苦手 好き n = 122	苦手 嫌い n = 1,711
第1因子				
英語が好きだから	88.3	39.1	74.6	13.5
英語の勉強がおもしろいから	83.1	35.1	72.1	11.9
英語を勉強すると視野が広がるから	73.5	53.1	64.8	32.8
外国を旅行するときに使いたいから	59.8	40.7	53.3	26.3
就職するときに役立つから	69.6	62.6	65.5	47.0
第2因子				
できるだけ良い高校や大学に入りたいから	83.5	79.2	69.6	64.6
英語のテストでいい点を取りたいから	88.1	86.4	83.6	71.6
中学生のうちは勉強しないとイケないから	76.0	84.1	77.1	78.5
成績が悪いと親にしかられるから	33.6	39.1	38.5	38.4
第3因子				
英語の先生がはげましてくれるから	28.2	15.5	36.1	12.8
英語の先生が好きだから	40.6	20.9	45.9	16.4
その他				
英語ができると優秀だと思われるから	22.3	16.9	18.0	8.5

注1) 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」の%。

注2) ■ は英語に対する認識別の中で最大値。

表3-6 「得意・苦手」と成績のクロス集計

(n=2,967)
(人)

	下の方	真ん中より下	真ん中くらい	真ん中より上	上の方
とても得意	3	2	12	52	<u>165</u>
やや得意	14	56	<u>334</u>	<u>321</u>	141
やや苦手	122	<u>296</u>	<u>391</u>	121	22
とても苦手	<u>502</u>	217	107	15	14

注)「無回答・不明」は省略。

重要性を認識しており、さらに教員と良好な関係にあるといえる。

英語が得意だが、英語を好きな教科として挙げなかった中学生(「得意・嫌い」群)は、第2因子の項目において高い割合を示した。特に、第2因子のうち、否定的な項目(「中学生のうちは勉強しないといけないから」と「成績が悪いと親にしかられるから」)については4群の中でもっとも高い割合であった。つまり、この群の中学生の特徴は、外発的に動機づけられていることであるといえる。

英語が苦手だが、英語が好きな教科であると考えている中学生(「苦手・好き」群)は、第3因子の項目が4群の中でもっとも高い割合を示した。つまり、この群の中学生の英語学習動機は、他の群と比べて、教員との関係に影響されているといえる。

最後に、英語が苦手、英語を好きな教科として挙げなかった中学生(「苦手・嫌い」群)は、どの因子の項目においても他群と比べて低い数値を示したが、第2因子のうち、「中学生のうちは勉強しないといけないから」という項目においては高い値を示した。つまり、外発的に動機づけられているといえる。「得意・嫌い」群との違いは、第1因子の項目においてみられる。「苦手・嫌い」群は、「得意・嫌い」群よりも、英語のおもしろさや重要度を感じていないことが示されている。

<注>

- (1) 「総合的な学習の時間」「その他」はここでは除いている。
- (2) クラスタ分析は、類似した変数のグループ化を行うための分析手法である。樹状図において、結ばれている位置が近いほど、変数同士が類似していることを示している。
- (3) ケンドールのtau b=.642、P=.000。ケンドールのtau bは、順位相関係数である。

教育的示唆としては、(1) 英語を得意としているかどうか、(2) 英語が好きな教科であるかどうか、という点から生徒を特徴づけし、それぞれが異なる英語学習動機を持っていると認識することである。得意か不得意かという判断は、英語の成績にほぼ対応すると考えられる。表3-6は、「あなたは英語が得意ですか、苦手ですか」の回答と「あなたの現在の英語の成績は、クラスの中でどれくらいですか」の回答とのクロス集計結果で、統計的にみても有意であった⁽³⁾。別の言い方をすると、英語の成績が比較的良好な中学生であっても「得意・好き」群と「得意・嫌い」群の間で、また、英語の成績が比較的低い中学生であっても「苦手・好き」群と「苦手・嫌い」群の間で、英語学習の動機づけが異なることが示唆されている。

3 おわりに

本章では、生徒の学習状況や学習意欲に焦点を当てて、「生徒調査」の結果を報告してきた。「英語嫌い」の増加や授業の理解度の低さ、教員と生徒の認識のずれなどの問題点が浮き彫りになった。教員の多忙化が加速するなかであっても、生徒の学習状況や学習意欲をよりよく理解することが、英語教育の改善につながる一歩であると思われる。